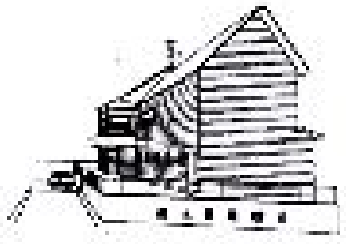
＜今日の聖書から＞先週は、弟子とされた人々、“シモンとアンデレ（1：16）”、“ヤコブとヨハネ（1：19）”の体験を通して、御言葉に聞きました。今朝はその続きになります。“彼らはカペナウムに行った。そして安息日にすぐ、イエスは会堂にはいって教えられた（1：21）”とあることからみましょう。イエス様の過ごされた世界は、“救い主などいない世界”ではなく“神の救いは知っている”と自称する、律法学者やパリサイ人と聖書が紹介しているユダヤ教の世界だったことに、もう一度気付かされます。私たちが“神や信仰を必要としないと言っている多くの人々”という場合と、意味は随分違っているようです。当時の会堂＝ユダヤ教のシナゴーグでは、毎聖日、礼拝をし、律法の解きあかしと祈りの時を持っていました。イエス様が教えられた、とあるのは、その様な地位にあったというよりは、当時の集会所では、学者や長老だけではなく、会堂つかさの許可を得た者は、教えることができたからの事でした。22節に“人々が驚いた”とあることに、まず心を向けましょう。驚いたということは、“いつもと違う”ということから始まるでしょう。当然それは、神のみ子であることによってなのですが、どこが違っていたのでしょうか。教える人々は“悪しき霊に侵されないように”とは言ったのですが、今もそうでしょうが、これだけでは脅迫にしかなりません。主イエスは、悪霊からの解放を教えられたのです。解釈すると、“それは罪だ”と指摘する代わりに“罪は赦された”という、最高級の教えを意味しているのです。このことは悪霊も認めていました（“わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」”と24節にあります）。さらに26節には、悪霊との論争の結果“けがれた霊は彼をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った”とあります。大声をあげたのは、この憑かれた人でしょうが、悪しき罪の霊はこの人から去り、この人の一番待ち望んでいたこと“罪の赦し”が成し遂げられたのです。律法学者などの教えには、“それは悪霊だ”と言って人々を脅迫する教えはありましたが、イエスが幾度となく語られた“あなたの罪は赦された”という宣言はなかったのです。この権威を目の当たりにした人々は、27節にあるように、認めました。また最初の四人は、体験的に認めました。この認めるという言葉はしかし、24節で、悪霊自身が、すなわち罪の力自身が口を開いているように、“あなたは私と何の係わりがあるのか？”ということにもなる時があります。信仰生活に挫折を感じたとしたら、“何の係わりがあるのか”と私たちも、救い主に言いかねないのです。初めに、“御名による赦し”があったことを忘れないようにしましょう。

週　報

２０１０年　１月　２４日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師　　村上　定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☎054-345-4070　E-Mail grace@big.jp
振替口座　00890-6-214042